

播磨国分寺跡

—第27次発掘調査報告書—

2022

姫路市教育委員会

序

播磨国分寺跡は姫路市御国野町国分寺に所在し、塔の礎石が良好に残るなど、古くから広く知られていました。現在では、二町四方の寺域が国指定史跡として保護されています。史跡内においては、これまで南大門、中門、金堂、講堂など主要伽藍の調査が行われ、その成果を元に築地塀等の復原や伽藍配置模型の展示など、往時をしのべる場として南半部の整備が行われています。

今回の調査は、史跡の外側にあたる寺域の北西側で病院建設に先立ち実施したものです。調査では古墳時代から室町時代にかけての遺構・遺物を多数確認しました。類例の少ない平安時代の緑釉陶器や文字瓦は播磨国分寺跡ならではの出土遺物といえます。それらが出土した区画施設は、平安時代の播磨国分寺の「別院」の可能性もあり、その発見は寺院の実態に迫る非常に大きな成果といえます。

ここに調査成果を報告し、播磨国分寺跡はもとより、姫路市域の歴史の解明と調査・研究の進展に資する所存であります。

最後になりましたが、発掘調査実施にあたり多大なご協力を賜りました医療法人松浦会姫路第一病院に心から御礼申し上げます。

令和4年(2022年)3月

姫路市教育委員会
教育長 西田 耕太郎

例言・凡例

1. 本書は姫路市御国野町国分寺字竹ノ下132番1、133番、150番1、153番1、150番12で実施した播磨国分寺跡第27次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は医療法人松浦会姫路第一病院による病院建設工事に先立って、令和2年(2020)9月15日から令和3年(2021)2月19日の期間に実施し、出土品整理作業及び報告書の作成は令和3年(2021)度を実施した。
3. 発掘調査は医療法人松浦会姫路第一病院の委託を受けて姫路市が実施し、現地調査および出土品整理作業、発掘調査報告書の作成は姫路市教育委員会 生涯学習部 埋蔵文化財センターが担当した。
4. 発掘調査および出土品整理作業、発掘調査報告書の作成・刊行に係る経費は事業者である医療法人松浦会姫路第一病院が負担した。
5. 遺構名の表記は、掘立柱建物跡(SB)、櫓(SA)、溝(SD)、柱穴(SP)、土坑(SK)とし、検出順に1番から通し番号を付している。
6. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位は全て座標北である。標高は東京湾平均海水準(T.P)を使用した。
7. 土層注記に用いた色調は『新版 標準土色帳』(1999年度版)に準拠している。
8. 本書で用いる土器類の分類名・編年および年代観は次の文献によっている。
弥生土器：長友朋子・田中元浩 2007「西播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年―播磨編―』大手前大学史学研究所、
在地土器：姫路市教育委員会 2018『姫路市埋蔵文化財センター報告第56集 村東遺跡』
姫路市教育委員会 2022『姫路市埋蔵文化財センター報告書第115集 豆腐町遺跡』
瓦：姫路市史編集専門委員会(編) 2010『姫路市史』第7巻下 資料編考古
9. 本文中に記載する出土遺物の番号は、全体で通し番号としている。
10. 発掘調査で得られた出土遺物、図面、写真等は姫路市埋蔵文化財センターにおいて保管している。
11. 発掘調査・出土品整理および報告書作成においては、下記の方々・機関より御協力を賜った。深く感謝の意を表します。(敬称略、五十音順)
尾野善裕、上原真人、平尾政幸、国分寺自治会、歴史土器研究会

目次

第I章	調査に至る経緯と経過	1
第1節	調査に至る経緯と体制	1
第2節	調査の経過	1
第II章	遺跡の立地と環境	2
第1節	遺跡の立地と環境	2
第2節	既往の調査	2
第III章	調査の成果	3
第1節	調査区の基本層序	3
第2節	検出した遺構と遺物	3
第IV章	総括	24
	写真図版	

第I章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と体制

姫路市御国野町国分寺竹ノ下132番1、133番、150番1、153番1、150番12において医療法人松浦会姫路第一病院によって病院建設工事が計画された。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である播磨国分寺跡（兵庫県遺跡番号：020482）に該当している。事業地については、国指定史跡播磨国分寺跡に近接することから平成27年度に内容確認の確認調査（遺跡調査番号：20150495）を21次として実施し、遺構・遺物を確認していた。その結果に基づき、工事により遺構が破壊される範囲を対象として、平成30年度に水路付替工事部分で26次調査、建物部分を令和2年4月23日付93条届出により、同年8月26日付けで姫路市と事業者とで委託契約を締結し、姫路市埋蔵文化財センターが27次調査として本発掘調査を実施した（遺跡調査番号：20200275）。

現地調査開始から整理作業終了までの体制は、以下のとおりである。

姫路市教育委員会

教育長 西田耕太郎（令和3年4月1日～） 文化財課
松田克彦（～令和3年3月31日） 課長 福永安洋

埋蔵文化財センター
館長 大谷輝彦（令和3年4月1日～）
松本 智（～令和3年3月31日）

教育次長 峯野仁志（令和3年4月1日～）
岡本 裕（～令和3年3月31日） 技術主任 大谷輝彦（～令和3年3月31日）
中川 猛（令和3年4月1日～）

課長補佐 岡崎政俊
森 恒裕

生涯学習部
部長 福永安洋
（令和3年7月1日より課長兼務）

多田暢久（令和3年4月1日～）
技術主任 中川 猛（～令和3年3月31日）
技師 三好愛美（令和3年4月1日～）

なお、発掘調査の現地作業は、事業者が直接契約した業者（安西工業株式会社 川鍋知秋 他）によって行った。

第2節 調査の経過

調査対象面積は1607㎡、遺構面は1面である。残土置場の制約から水路を境に調査区を3分割した。令和2年9月15日より西部から調査を開始した。盛土等を重機により掘削し、遺構検出及び遺構の調査は人力によって行い、調査の進捗に伴い適宜、記録のための写真撮影、実測図面の作成、空中写真測量を実施した。11月25日に西側部分の調査を終え、その後、南部の調査を引き続き行った。2月19日に北部の調査を終え、全ての現地作業が完了した。遺物はコンテナ（L590mm×W386mm×H106mm）約560箱分が出土した。令和3年度に整理作業を行い、本報告書の刊行をもって全ての事業を終了した。



調査地から主要伽藍を望む(北から)

第二章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地と環境

調査地は、兵庫県姫路市御国野町国分寺竹ノ下に所在する。市川東岸の河岸段丘上に位置し、標高は約11mである。調査地の南側には国史跡に指定された二町四方の播磨国分寺跡が広がる。国分寺の南側には近世の西国街道が通る。古代山陽道の位置は不明であるが、国分寺の選地にあたっては、その存在が考慮されたと推測できる。

調査地の東には、弥生時代中期から後期を中心とする集落跡である国分寺台地遺跡が所在する。古墳時代中期には、壇場山古墳を中心に林堂東塚古墳（第1古墳）、櫛之堂古墳（第2古墳）、山之越古墳（第3古墳）の国指定史跡が段丘上に築かれている。壇場山古墳は、兵庫県下第2位の規模を有する古墳時代中期の前方後円墳で、播磨国造の系譜を引くとも推測されている。

奈良時代には調査地に播磨国分寺が、その北約600mには、播磨国分尼寺が建立された。

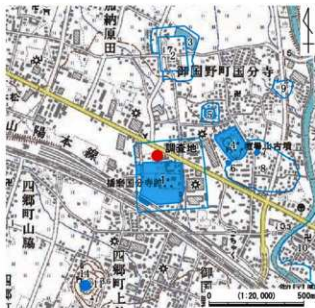


図2 調査地周辺の遺跡

第2節 既往の調査

播磨国分寺跡における発掘調査は、国指定史跡の内容確認等を主目的とし昭和43（1968）年以降、断続的に行われた。二町四方（約218m）を占める寺域の南北中軸線上に、南から南大門、中門、金堂、講堂などの主要伽藍が一直線に並び、塔が南東隅に位置するいわゆる東大寺式伽藍配置を探ることが判明した。伽藍中軸線の方位は概ねN-4.3°-Wである。平成4年には、指定地の南半分を対象とし、発掘調査成果に基づいて、築地塼や瓦敷の参道、伽藍模型等を整備した。近年では史跡周辺において発掘調査が進み、国分寺の立地に関する成果が得られている。東側で実施した25次調査では低湿地が広がる状況が判明した。西側についても鉄道敷地内で実施した8次調査で低湿な環境にあることが判明して

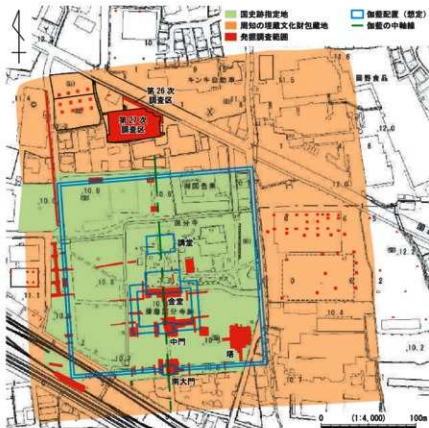


図3 播磨国分寺跡の調査位置

いる。このように播磨国分寺は、東西に湿地があり、南北に延びる舌状の微高地上に主要伽藍が建立された立地環境にあることが明らかとなってきている。今回の調査地は、主要伽藍と連続する微高地上に立地し、主要伽藍の北、伽藍中軸線より西側に位置している。

第三章 調査の成果

第1節 調査区の基本層序

基本的な層序は、図5に示すとおり、盛土（厚さ80cm～1.0m）、耕土（10～20cm）、床土（0～5cm）を経て黄褐色～灰白色シルトの地山に至る。本調査地が立地する場所は、市川下流東岸に見られる5段の河岸段丘の内、3段目にあたる船津面に該当する（姫路市史1998）。調査地で地山とした土は、船津面を構成する堆積層の上面にあたる。地山の標高は北端で10.81m、南端で10.53mとわずかに傾斜している。床土は極めて薄く、耕土直下で地山が検出できる場所も多い。遺構検出は全て地山上面で行った。

第2節 遺構と遺物

検出した遺構は、掘立柱建物跡12棟、溝23条、土坑、柱穴等である。遺構の時期は、弥生時代から室町時代にかけてである。以下、検出した遺構を大きく弥生時代後期、平安時代、中世に分けて報告する。

弥生時代後期

調査区を北西から南東に斜行する3条の溝である。溝の方向は調査地から東へ約300mの位置にある壇場山古墳の築かれた段丘の延びる方向と概ね一致している。

SD704 調査区南西部で検出した溝で、北西方向から南東方向へ延びる。延長15.5m、幅1.1～1.7m、深さ40cmを測る。埋没段階は大きく3段階に分けられるが、主な埋土は褐灰色シルトである。遺物は2層から弥生時代後期の土器（1～3）、埋土から（4）が出土している。

SD467 調査区西部で検出した溝で、SD140が調査区西端とぶつかる位置から南東方向へ延び、直線的に調査区南壁に達する。検出規模は延長27m、幅60～70cm、深さ11～20cmを測る。埋土は褐灰色シルトの単一層で、遺物は出土しなかった。

SD1360 調査区北東部で検出した溝で、後述するSK1209から南東方向へ延びる。南端部は現代の側溝で切られており、側溝南側では延長部が検出されなかったことから、当該部で収束するものと考えられる。検出規模は延長22.7m、幅22～48cm、深さ4cmを測る。埋土は単一層で褐灰色シルトを主とし、明黄褐色ブロックが混じる。遺物は出土しなかった。

遺物が出土した遺構はSD704のみであるが、SD467・SD1360についても北西から南東に延びる点、埋土が類似している点で同時期の遺構と考えられる。

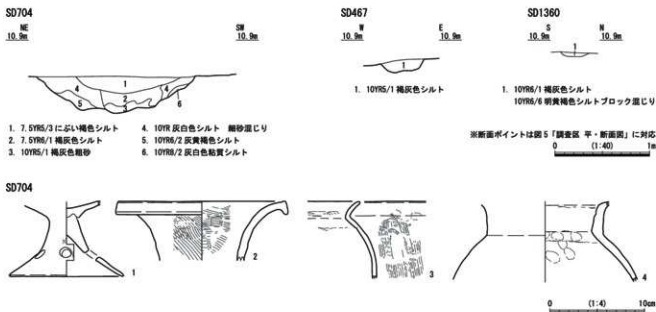


図4 SD704・SD467・SD1360 土層断面図、SD704出土遺物

平安時代

調査地においては、奈良時代に位置づけられる明確な遺構は確認できず、活動が確認できるのは、9世紀に入ってからで、概ね10世紀代で終息している。国分寺創建段階では、調査地まで国分寺に関連する施設が広がっていなかったと考えられる。検出した遺構は大型遺構（SX333）、溝7条、掘立柱建物跡3棟（SB1～3）、柵2条（SA1・2）、瓦敷遺構、被熱痕跡等で調査区西部に集中している。このうちSX333は、検出時点では東西方向に延びる溝と認識していたが、調査の進捗により、単なる溝ではなく、内部に複数時期の遺構が変遷していることが判明した。遺物の出土量も多く、本調査区を考える上で極めて重要な遺構であることから、まずSX333から報告を始めたい。

SX333 規模は南北約13.5m、東西約19mで、この範囲全域を遺構検出面である黄白色の地山を約50cm掘り込んでいる。北端部はSD388に切られているが、土層断面からSD388北肩と大きく変わらない位置に本来の立ち上がりを想定できる。最終的に埋没するまでに、土層断面から大きく2層（図6のI層、II層）に分層でき、I層下位（SX333底面）、I層上面、II層上面にて、それぞれ遺構を検出した。以下に検出層位毎に報告する。

① I層下位 SX333の底面にあたり、SX333内で最も古い遺構である。全域で南北方向と東西方向に幅25～69cmの溝を確認した。東西方向が先行し、その後南北方向に溝が約1.2m間隔で掘り込まれる。検出できていない部分もあるが、本来は遺構底面全域に格子状に溝が掘り込まれていたと考えられる。この一連の溝は、SX333の下部構造とみられ、排水等を目的としたものと考えられる。その上部をI層が被覆する。I層は一見地山に類似した均質な土層であるが、地山土がブロック状に混じっていることから、人為的に形成されたものと考えられる。こうした点からSX333は掘込総地業の可能性を考えておきたい。ただ、播磨地域において、典型的な掘込総地業の存在は現時点では確認されていないことからその可能性を指摘するに留める。

② I層上面 SX333の北半部でSD650、SB1、瓦敷遺構、南半部でSD720をそれぞれ検出した。この面で確認した遺構は切り合い関係から前後関係が判明しているものがあり、少なくとも3時期の変遷が確認できる。古い遺構から順に第1段階・第2段階・第3段階として整理した。以下、段階毎に報告する。

第1段階 SX333北半部でI層を掘り込むSD650、SX333の南肩に沿ってSD720が掘られる。SD650とSD720の切り合い関係は不明である。

SD650 幅は60～150cm、深さは6～10cmを測る。溝の北端部はSD388によって切られるため広がり不明である。SD720との切り合い関係も不明である。埋土は黄灰色シルトを主とし、ブロック状や筋状に灰黄色土が混じっている。遺物は主として南北方向に延びる範囲から出土した。土師器皿（17～22）・杯（23、24）・椀（25）・甕（26）・蓋（27）、内面黒色の黒色土器椀（28）、須恵器皿（29）・椀（30～32）を図示した。このうち、20・22・26・32を除き、他はほぼ同一地点からまとまって出土した。土師器杯24の底部切り離しはヘラ切りによるものである。

SD720 全長23m、幅40～150cm、深さ11～26cmを測り、西端は調査区外へ延びる。東端は調査区の中中央付近まで延び、南側へ屈曲する。上部は既存水路により削平を受け狭くなっているが、本来は同規模の溝が続いていたと思われる。溝が屈曲する部分からSD982へ向かう分岐が認められる。分岐した溝の底面は本体部に比べて浅いが埋土は同じである。埋土は褐色シルトの単一層、水流があったようには見えない。何らかの区画溝であると考えられる。遺物は土師器皿（33～35）・杯（36～40）・椀（41、42）・蓋（43）・甕（44）、須恵器壺（45）・椀（46）が出土した。土師器皿33・34の底部切り離しはヘラ切りによるものである。

第2段階 SX333の北半部においてSB1を検出した。SB1はSD650の埋没後に構築され、後述する瓦敷遺構に切られている。

SB1 検出規模は1間×5間の東西棟であるが、調査区西側に更に延びる可能性もある。主軸方向はN-6.0°-Wに直交し、南北1間2.74m、東西5間11.37m、平面積31.15㎡である。柱穴は隅丸方形の崩れた形状を呈するが、本来は方形掘方を指向していたと思われる。一辺43～72cm、深さは10～48cmを測る。遺物は、SP603から内面黒色の黒色土器椀（5）とSP642からは土師器皿（6・7）、椀（8）、SP781からは土師器皿（9）が出土した。

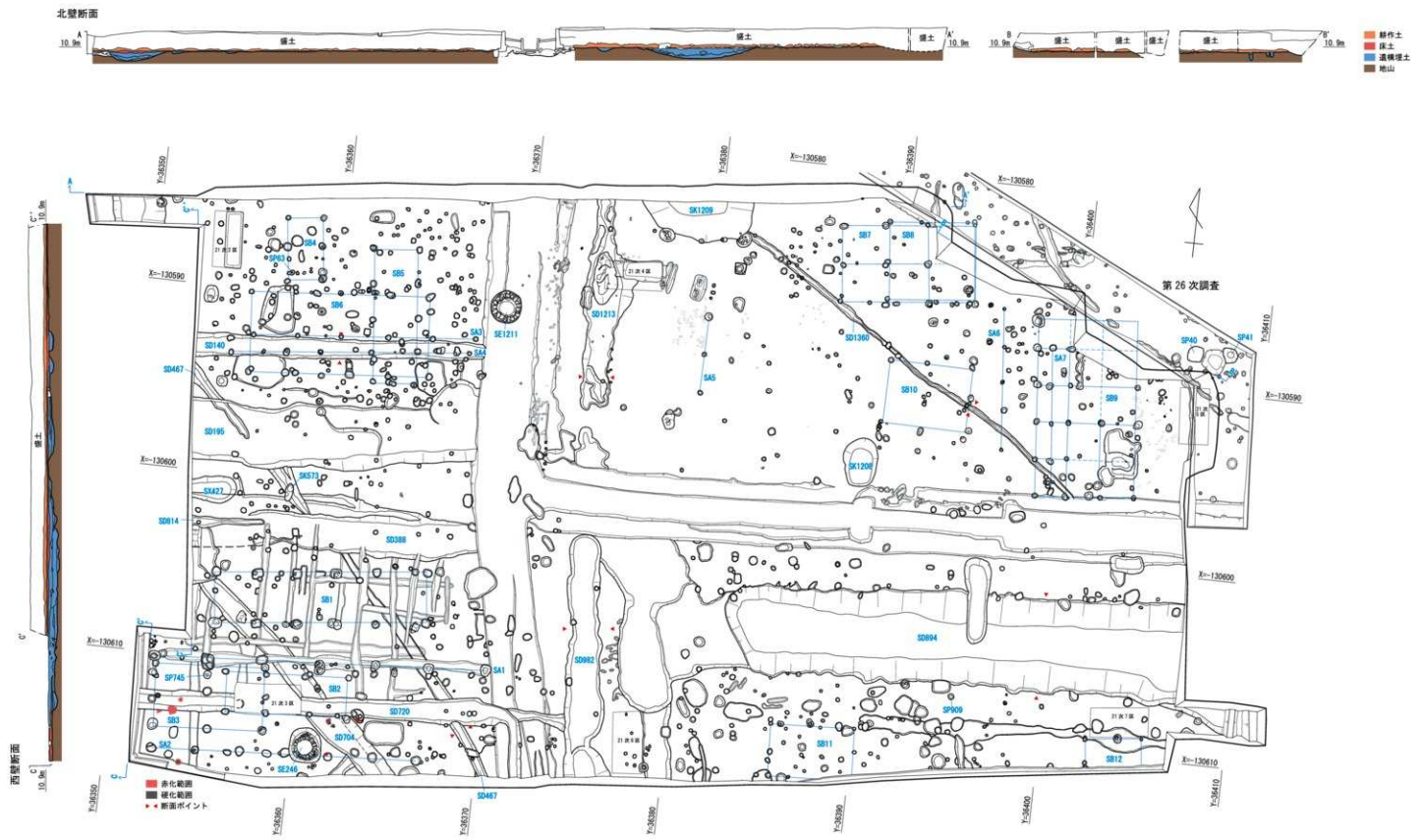


図5 調査区平・断面図

第3段階 I層上面で検出した遺構のなかで、最も新しい段階にあたり、瓦敷遺構を検出した。

瓦敷遺構 平面的にSB1と重なる位置で検出した。瓦を取り上げた後でSB1を構成する柱穴跡が検出できたことから、後出する遺構である。調査段階では、広い範囲に瓦が広がっていたが、最終的に動いていないと判断した範囲は東西約7m、南北約3mである。SD388の肩と並行して東西方向に伸びる部分を瓦敷1、SD650に沿って広がる部分を瓦敷2とする。図8では瓦敷1と2の間をSD650の南北部分が切ったように図示しているが、これは調査完了時の状況を示したもので、本来的には写真図版3下が近く、SD650上面にも多くの瓦が広がっていた。瓦敷1は石材を間に配し、南側に面を持っている。このことから、北側に広がる遺構の一部の可能性もある。また、瓦敷2は平面的に瓦を敷き詰めた状態で、史跡地内にあたる主要広場で実施した過去の調査においても、こうした瓦敷遺構が確認されており、関連がうかがえる。瓦敷1と瓦敷2の内側では、平坦面を上部に据えた大型の石材を2石検出した。2石であるため、断言はできないが礎石建物が存在した可能性もある。その場合、瓦敷2は建物の西側に敷かれたと想定でき、瓦敷1については、礎石建物と同時期か別の遺構となる可能性もあり確定できない。第1段階で述べたようにSX333が掘込総地業であるとすれば、瓦敷を伴う礎石建物の建築を目的とした可能性もあるが、先行してSB1が存在するなど、単純な様相ではない。また、その性格についても判然としないが、SB1と瓦敷遺構がSX333に伴う施設であることは確実で、これらの施設を建てる目的でSX333が掘り込まれたことは疑いない。

II層 SX333の上層埋土にあたり、全体を覆うように堆積している層である。褐灰色シルトを基調とし、多量の炭化物、瓦、礫を含み、人為的に埋めたものと考えられる。遺物の出土は中～下位に集中し、上位では少ないという様相であった。播磨国分寺で使用された瓦を多く含むが、土器には奈良時代のものはほぼなく、平安時代に位置づけられる。土師器皿(47～49)・杯(50～53)・碗(54～57)、緑軸陶器皿(58～60)・碗(61～63)、須恵器皿(64、65)・碗(66)・蓋(67)・壺(68、69)、風字硯(70、71)、瓦質土器壺(72)、国分寺式軒丸瓦(73、74)、国分寺式軒平瓦(75)、長坂寺式軒平瓦(76)、古大内式系統の軒平瓦(77)、平瓦(78～82)等が出土した。土師器碗56は内面に漆が付着している。須恵器蓋67の内面には墨状の付着物が認められる。79～82は文字瓦で、79・81には「嶋主」、80・82には「英」の字が篋描きされている。緑軸陶器60は東海産(猿投)、61・63は畿内産、62は東海産(美濃)で、これらの緑軸陶器はいずれも9世紀中～後半に位置づけられる。出土状況からあまり大きな時間差をたまず、在土土器を多く含む、かつ年代をおさえることができる資料である。また、前述のSD650出土遺物は切り合い関係からこれらに先行する位置づけを与えることができる。播磨地域における当該時期の資料群は少なく、出土状況を含め良好な資料群といえる。

③ **II層上面** SX333の埋没後に構築された遺構である。その広がりにはSX333の範囲を超えたものもあり、厳密にはSX333とは関係は不明である。SX333の南側で検出したSB2・SB3、SA2については、調査の過程でI層上面において検出した柱穴もあるが、断面図に見るようにII層上面から掘り込まれている。SA1についてはI層上面で全容を検出したことから、掘り込み面の特定は難しいが、主軸方向がSB2・SB3、SA2と共通することからII層上面の遺構として位置づけた。ただ、SA1はSB2と柱穴の直接の切り合い関係からSB3に先行する遺構であり、わずかに時期差が存在する。

SB2 SB1から南へ約2.6mの場所で検出した。北面にあたる柱穴跡は、先に述べた通り、対となる南面柱穴跡検出と同じ面で建てられたのが自然と考えられる。一部がSX333を超えて広がる。1間×3間の東西棟で、建物の主軸方向はN-3.5°-Wである。検出規模は梁行1間で2.18m、桁行3間で6.68mを測り、平面積は14.56㎡である。柱穴は直径30～40cm、深さは2～40cmを測る。遺物は出土していない。

SB3 SB2とは建物東側1間分が重なっているが、柱穴の直接の切り合いがないため、前後関係は不明である。検出位置から西へ広がる可能性があるが、1間×2間の東西棟の建物跡と考えられる。建物の主軸方向はN-3.5°-Wである。南北1間で3.34m、東西2間で5.76m、平面積は19.24㎡である。柱穴は直径32～64cm、深さは3～72cmである。SB2に比べて柱穴規模は大きい。遺物はSP416から土師器のへら切り杯(10)、碗(11)、軒丸瓦(12)が出土した。12は単弁十二葉蓮華文に復元でき、面径約26cmを測る大型品である。播磨国分寺跡のII期(9世紀後半から11世紀中葉頃)に位置づけられている(姫路市2010)。

SA1 SB1の南側で検出した。東西方向に7基の柱穴が並び、延長17.9mを測る。柱穴は直径45～65cm、深さは28～56cmを測る。遺構の主軸はN-3.5°-Wに直交する。遺物は、SP773から回転糸切り須恵器碗(13)、

須恵器鉢 (14)、SP807から土師器杯 (15)、椀 (16) が出土した。

SA2 SX333の南側の地山上面で検出した。東西方向に7基の柱穴が並び、延長14.2mを測る。柱穴は直径37～54cm、深さは8～44cmを測る。遺構の主軸はN-3.5°-Wに直交する。遺物は出土していない。

SD388 SX333の北端で検出した溝で、東西方向へ延びる。検出規模は延長15.3m、幅1.6～3.4m、深さ15cmを測る。埋土は黄褐色シルトで炭化物を含む。遺物は土師器皿 (83～88)・椀 (89)・蓋 (90,91)・杯 (92,93)、内面黒色の黒色土器碗 (94)、緑釉陶器椀 (95)、龍泉窯青磁碗 (96)、須恵器杯 (97)、蓋 (98) が出土した。96のように時期が少し下るものも含まれている。

被熱痕跡 SX333埋土層にあたるⅡ層上面から南側の地山上面にかけて検出した。7か所確認でき、規模は20～40cmで、同心円状に被熱した痕跡が確認できる。上部構造は残存していない。層序的には同時期ではないが、Ⅰ層上面で検出した瓦敷遺構2の北側でも被熱痕跡を確認している。鍛冶滓等は全く見つからないが、Ⅱ層中にも多くの炭化物を含むことから、当該地において火を使用する手工業生産が継続的に行われていた可能性もある。

SD140 SX333から北へ約3.6mで検出した東西方向の溝である。延長15.5m、幅90～120cm、深さ18cmを測る。現代水路から東側では検出できないことから、東端は、水路の攪乱内に収まる。

SD195 SD140から2.3～2.8m南側で検出した東西溝で、延長15.3m、幅2.9～4.0m、深さ35cmを測る。遺物は土師器椀 (108)、9世紀中から後半に位置づけられる東海(猿投)産の緑釉陶器皿 (109)・緑釉陶器椀 (110,111) とともに、須恵器椀 (112)・壺 (113) が出土している。

SD140とSD195の間隔は2.3～2.8mで、この間は同時期の遺構はなく、地山が残されている。また、SD140以北でも平安時代の遺構は確認できない。SX333と主軸を同じくすることから、これらの溝はSX333に伴う区画遺構と考えられる。

SD982 調査区中央付近で検出した南北方向に延びる溝である。検出規模は延長13m、幅1.4～2.5m、深さ26～52cmを測る。南端は調査区外へと続いている。先述したSD720の屈曲部と並行することから一連で区画遺構となると思われる。なお、SX333はSD982までは延びておらず、このSD982がSX333を含む一連の遺構の東端にあたるものと考えられる。溝は灰白色シルトで埋まった後に、少し狭い幅で掘り込まれた箇所が黒褐色シルトで埋まっている。遺物は土師器杯 (114,115)・椀 (116～119)・羽釜 (120)・高杯 (121)、越州窯青磁椀 (122)、須恵器杯 (123)・椀 (124,125)、平瓦 (126) が出土している。126は竈で「英」と書かれている文字瓦である。

SD1213 調査区北部中央付近で検出した溝で、南北方向へ延びる。検出規模は延長11.3m、幅80～270cm、深さ24cmを測る。北端は調査区外へと続いている。検出位置からSD982とともに東端を区画する溝と推測する。埋土は灰白色シルトの単層である。遺物は須恵器蓋 (127)・椀 (128) が出土した。

SK573 SD195とSD388の間、やや西寄りの位置で検出した南北にやや長い楕円形の土坑である。平面規模は長軸90cm、短軸40cm、深さは遺構検出面から9～12cmを測る。遺物は土師器皿 (99)・杯 (100～103) が土坑底から浮いた状態ではあるが、まとまって出土した。

SK1208 調査区中央よりやや東寄り、東西方向に延びる現代の水路の北側に近接する位置で検出した楕円形の土坑である。平面規模は長軸2.55m、短軸1.65mを測る。遺物は製塩土器 (134) が出土している。

SP63 後述するSB4の内側で検出した。直径27cm、深さは6cmを測る。遺物は平瓦 (104) が出土している。竈で「成」と書かれている文字瓦である。

SP745 SB3と平面的に重なる位置で検出した。直径41cm、深さは26cmを測る。遺物は回転系切の土師器椀 (105)・三足皿 (106)の脚部が出土している。

SP909 SD894の南側で検出した。直径46cm、深さは23cmを測る。遺物は須恵器壺 (107) が出土した。

平安時代の遺構の広がり、今回の調査範囲では西側に偏る傾向が見られたが、27次に先行して実施した26次調査では一辺約83cmの方形掘方の柱穴が検出されている。時期は不明であるが、当該時期の遺構の可能性もあり、粗密を持ちながらも遺構が広がっている可能性も考えられる。

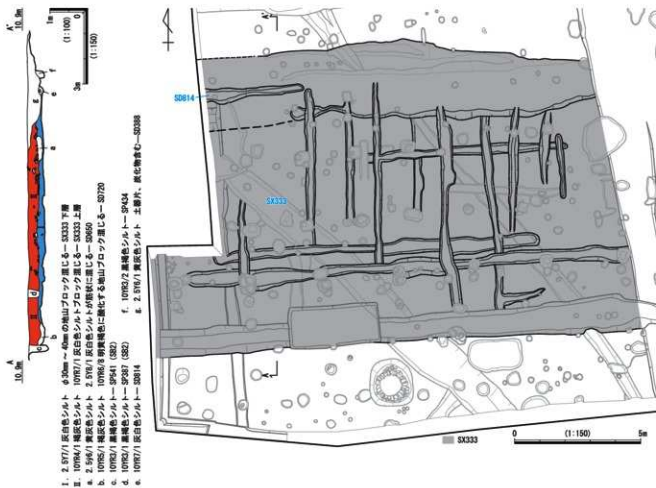


図6 SX333関連 断面図・SX333 I層下位 遺構平面図

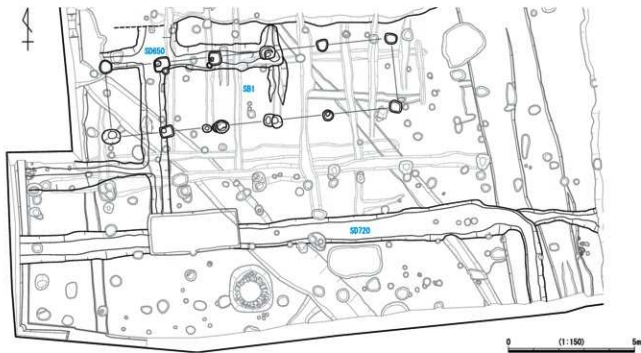


図7 SX333 I層上面 遺構平面図 (1・2段階)

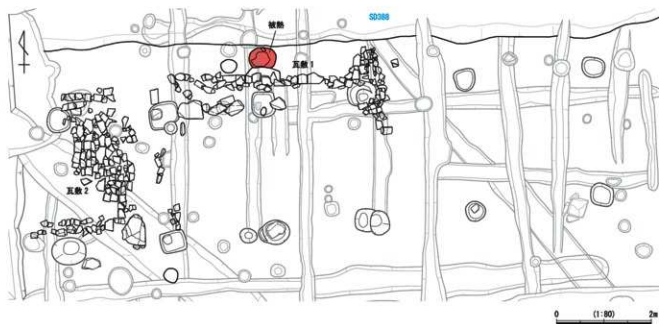


圖8 SX333 I層上面 遺構平面圖 (第3段階)

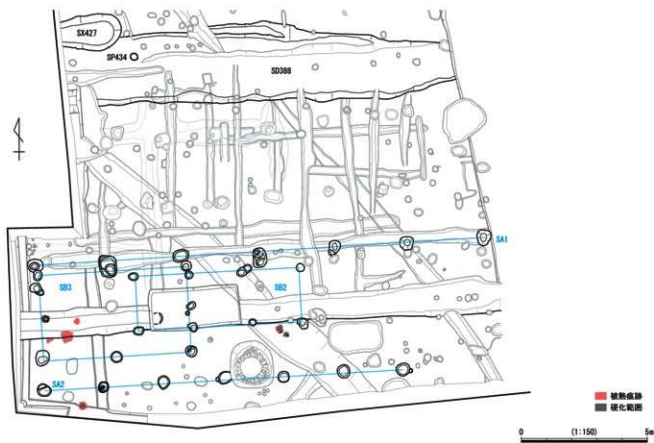
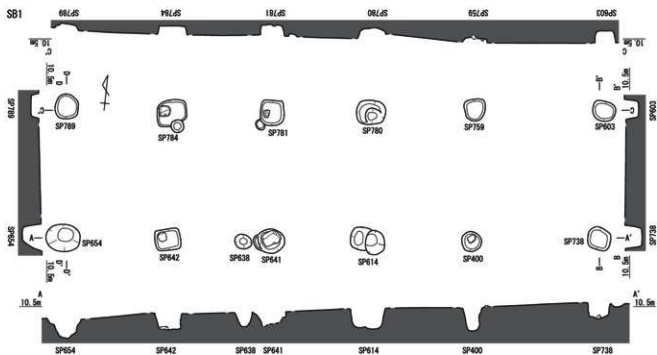


圖9 SX333 II層上面 遺構平面圖



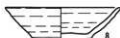
SB1
SP603



SP642



SP781



0 (1:4) 10cm

SB2

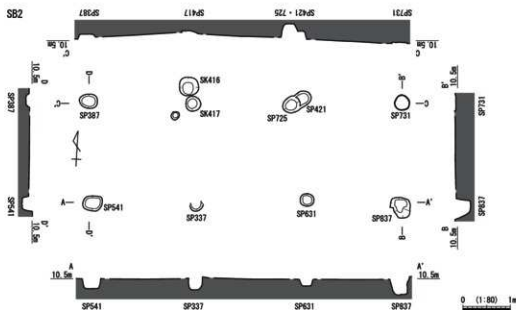


图10 SB1·SB2 平·断面图、SB1 出土遗物

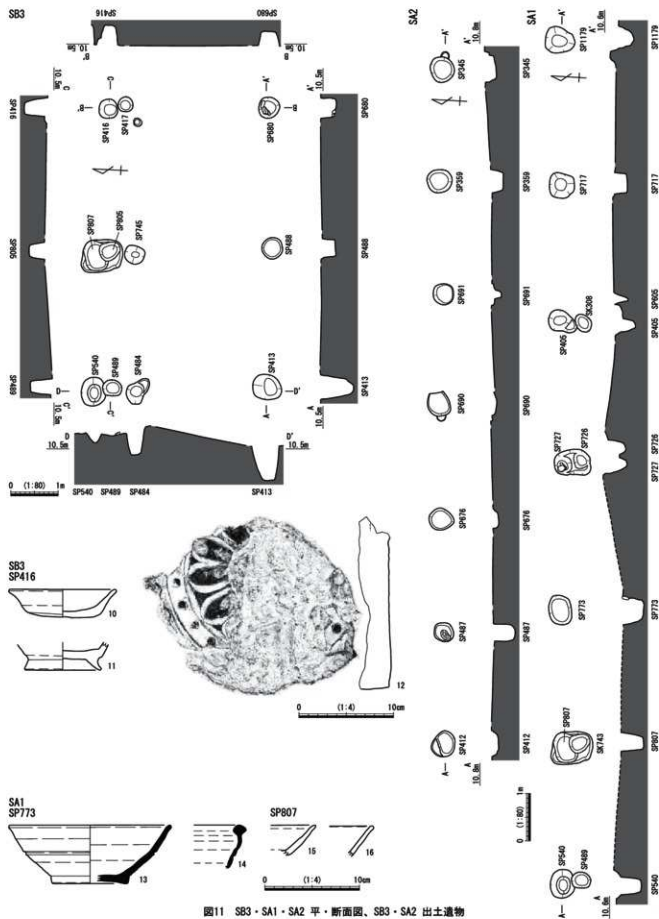
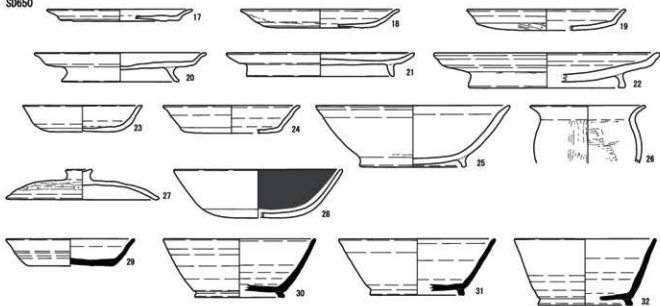
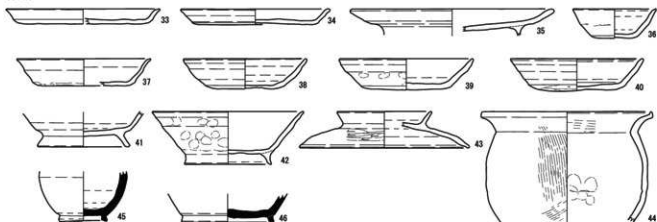


图11 SB3·SA1·SA2 平·断面图、SB3·SA2 出土遗物

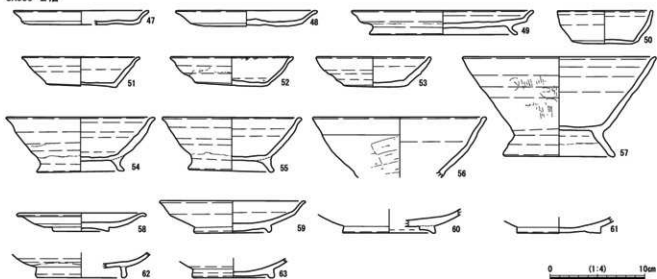
SD650



SD720



SX333 Ⅱ層



0 (1:4) 10cm

图12 SD650・SD720・SX333 出土遺物

SX333 Ⅱ層

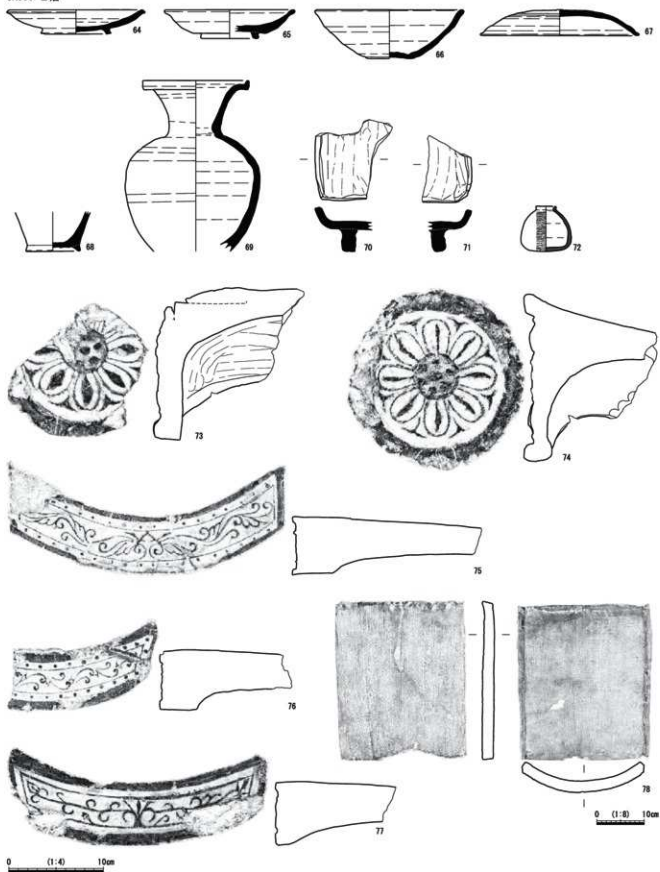
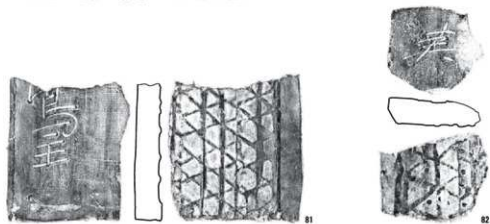


圖13 SX333 出土遺物



SD388

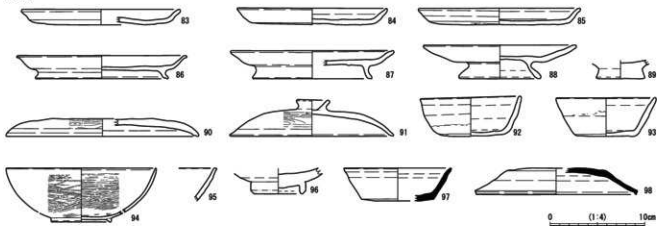
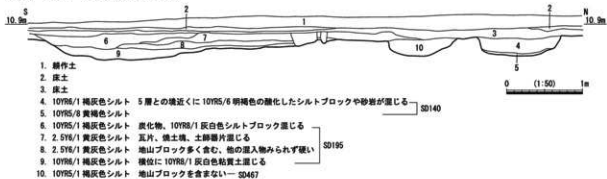


圖14 SX333・SD338 出土遺物

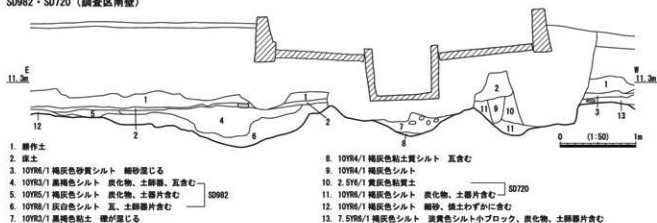




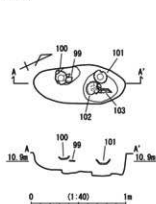
SD195・SD467・SD140 (調査区西壁)



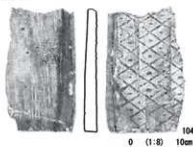
SD982・SD720 (調査区南壁)



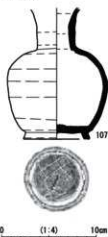
SK573



SP63



SP909



SP745

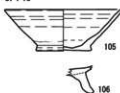
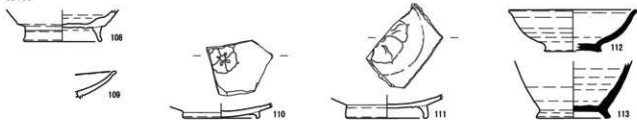
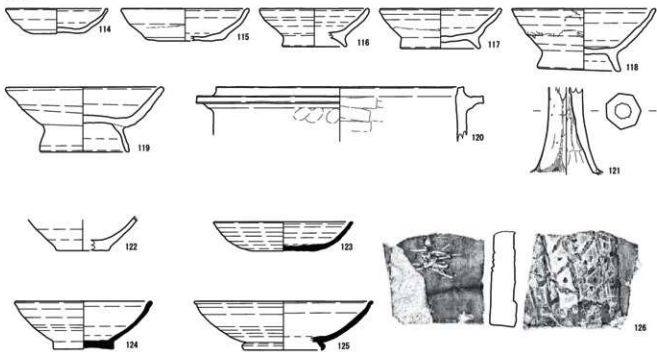


図15 SD140・SD982・SD1213・SD195・SD720 断面図、SK573・SP63・SP745・SP909 出土遺物

SD195



SD982



SD1213



图16 SD195・SD982・SD1213 出土遺物



110
111
輪刻陶器 (110・111)

12
折丸瓦 (12)

中世

検出した遺構は掘立柱建物跡9棟、柵4条、溝、土坑、ピットである。遺構の規模や出土遺物から、平安時代の遺構とは全く性格の異なる遺構群と考えられる。播磨国分寺は、南北朝期の戦乱によって消失したとされているが、調査では、12世紀後半から15世紀にかけての遺構が確認されている。

SB4 調査区の北西で検出した。1間×2間の建物跡である。主軸方向はN-4°-Wである。梁行1.43m、桁行3.36mを測り、平面積は4.8㎡である。遺物は、SP10から土師器皿(129)が出土した。

SB5 SB4の東で検出した。1間×4間の南北棟建物である。主軸方向はN-4.5°-Wである。梁行2.4m、桁行7.21mを測り、平面積は17.3㎡である。遺物は、SP95から東播系須恵器鉢(130)が出土した。

SB6 SB5と平面プランが重なる位置で検出した。2間×5間の東西棟で、主軸方向はN-4°-Wに直交する。梁行4.27m、桁行9.28mを測り、平面積は39.63㎡である。遺物は出土していないが、SB4～SB6は主軸を同一にし、柱穴の規模も類似することから一連の建物跡と考えられる。SB4・SB5の出土遺物から、3棟は鎌倉時代と想定される。

SB7 調査区北東部で検出した。2間×3間の東西棟の総柱建物跡と考える。主軸方向はN-7°-Wである。梁行4.26m、桁行6.9mを測り、平面積は29.394㎡である。遺物は出土していない。

SB8 SB7と重なる位置で検出した。2間×2間の建物跡と考える。SB7のSP1252がSB8のSP1253を切っていることから、SB7より古い。主軸方向はN-4.5°-Wである。東西方向2.47m、南北方向2.2mを測り、平面積は5.434㎡である。遺物は出土していない。

SB9 SB8の東で検出した3間×5間の南北棟の総柱建物跡である。主軸方向はN-4°-Wである。梁行5.47m、桁行9.96mを測り、平面積は54.48㎡である。SP1219から土師器皿(131)、SP1220から土師器皿(132)、SP1227からは土師器皿(133)が出土した。

SB10 SB9の西で検出した2間×2間の建物跡である。主軸方向はN-0.5°-Wである。南北方向3.4m、東西方向4.5mを測り、平面積は15.3㎡である。遺物は出土していない。SB7～SB9は建物の主軸方向がほぼ同じで、柱穴の規模、埋土が共通することからSB9と同時期の13世紀頃と考えられる。

SB11 調査区南端で検出した2間×2間以上の建物跡である。主軸方向はN-3.5°-Wである。東西方向4.55m、南北方向2.8mを測る。遺物は出土していない。

SB12 SB11の東で検出した1間×2間以上の建物跡である。主軸方向はN-3.5°-WでSB11と揃う。南北方向1.65m、東西方向3.4mを測る。遺物は出土していない。

SA3 延長11.9mを測る。主軸方向はN-4°-Wに直交する。

SA4 SA3の南側で検出した。延長12.8mを測り、主軸方向はN-6°-Wに直交する。

SA5 延長4.1mを測る。遺構の主軸はN-0°-Eである。

SA6 SB9とSB10の間で検出した。延長7.5mを測る。主軸方向はN-5°-Wである。

SA7 SB9と平面的に重なる位置で検出した。延長7.7mを測る。遺構の主軸はN-5.5°-Wである。

SD894 調査区南東部で検出した溝で、東西方向へ延びる。延長24.4m、幅4.4～4.5m、深さ54cmを測る。平安時代の溝と主軸方向は揃うが、溝の規模、様相は大きく異なっている。溝の断面は皿状を呈し、切り合いから2時期の変遷がうかがえるが、規模は大きく変わっていない。遺物は図示に耐えるものはないが、土師器等の細片が出土しており、中世後半とみられる。西側で途切れることから水路ではなく、播磨国分寺跡の地割に沿った何らかの区画遺構と考えられる。

SK1209 調査区北端中央部で検出した土坑である。調査区外へ続いているため、全形は不明だが、確認できた規模は長軸5.8m、短軸2.3m、深さは55cmを測る。遺物は石造品を構成する部材とみられる石製品(135)が出土している。

SE246 SB2の南で検出した石組み井戸である。掘方は略円形で、長軸2.35m、短軸1.95mを測り、石組みの内径は76cmである。深さは4m、井戸底の標高は7.51mである。

SE1211 旧水路下で検出した石組み井戸である。掘方は円形で、直径1.75mを測る。石組みの内径は88cmである。深さは1.6mで、井戸底の標高は8.85mである。両井戸とも遺物が出土していないため時期は不明である。

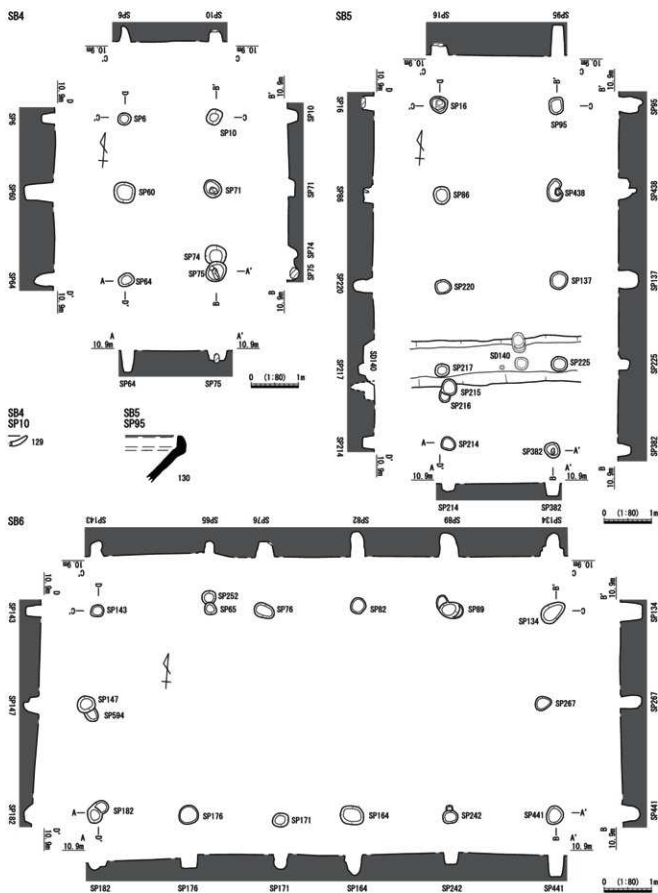


图17 SB4~SB6 平·断面图、SB4·SB5 出土遺物

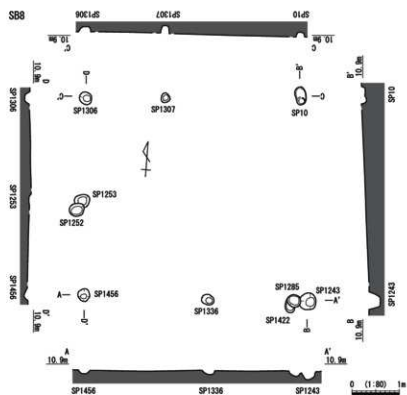
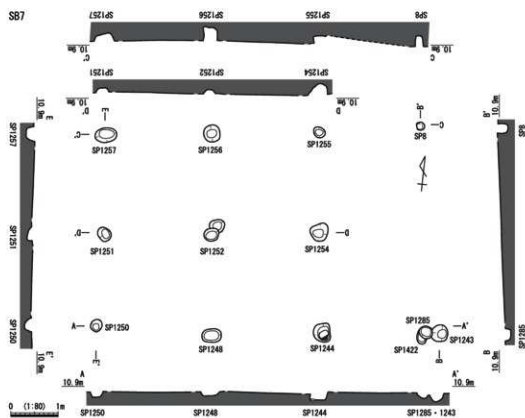


圖18 SB7·SB8平·断面圖

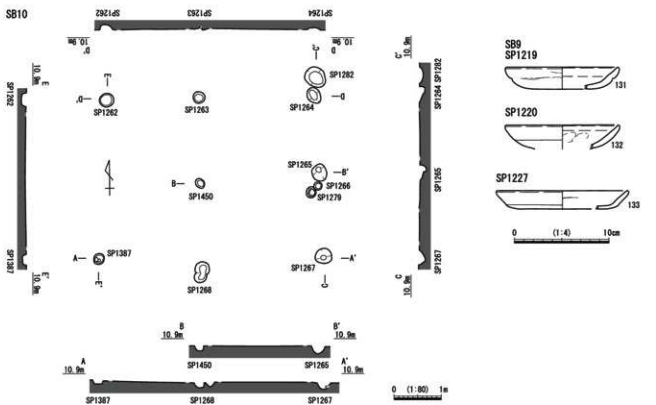
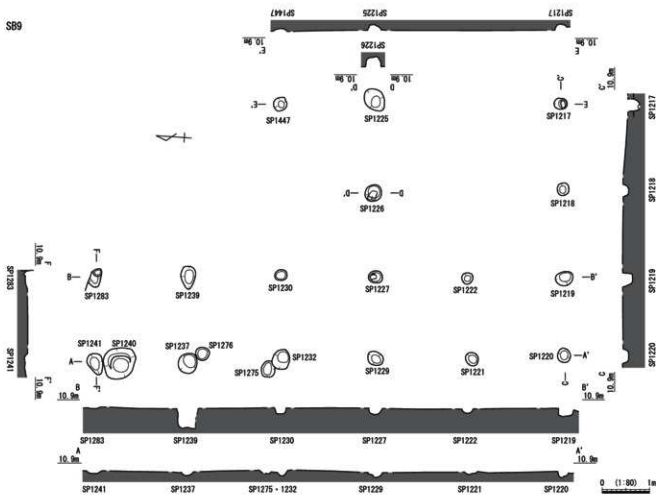


图19 SB9·SB10 平·断面图、SB9 出土器物

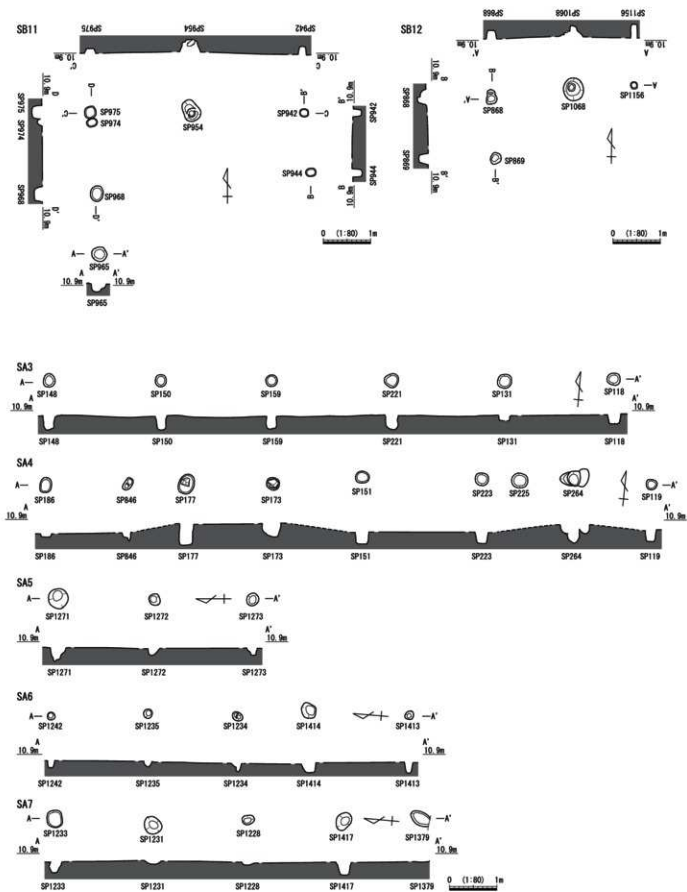
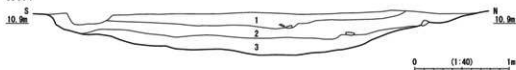


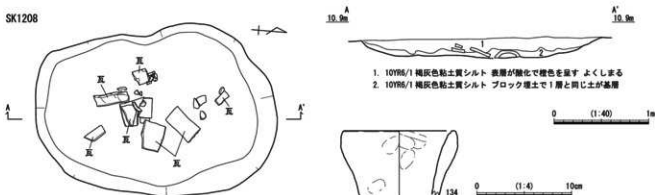
图20 SB11·SB12·SA3~SA7 平·断面图

SD894



1. 5Y5/1 灰白色砂質シルト 塊状に2.5Y5/1 黄灰色砂質シルトブロック混じる
2. 10YR5/1 褐灰色シルト 地山由来の黄褐色シルトブロックや混じる
3. 10YR6/1 褐灰色粘質土

SK1208



1. 10YR6/1 褐灰色粘土質シルト 表面が酸化で橙色を呈す よくしまる
2. 10YR6/1 褐灰色粘土質シルト ブロック塊状で1層と同じ土が基層

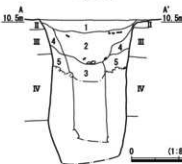
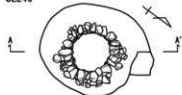
SK1209



1. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 上位に地山の灰白色小礫粒多量、酸化して7.5YR5/8 明褐色を呈す
中位より下に10YR5/1 褐灰色粘質土が、10YR4/1 褐灰色粘質土ブロックや、10YR7/6 明黄褐色砂質（地山）を
小ブロック状に多く含む
2. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト 細砂、互が混じる
3. 10YR3/2 黄褐色粘土質シルト 大小の河原石が礫に準りに位置を保って沈み込んでいる



SE246



1. 2.5YR/1 灰白色粘土質シルト 2.5Y5/1 黄灰色粘土を塊状に混入、
Fe、Mnを多く含む、粘性強い、硬い
2. 5YR/1 灰白色シルト 2.5Y5/1 黄灰色粘土を塊状に混入、互片、
3層境に径50mm程度の河原石見られ、軟らかい
3. 5Y7/1 灰白色粘質土 褐色粘土を小ブロック状に多く含むため、
埋戻し土と考えられる
4. 2.5YR/2 灰白色粘質土 2.5Y2/1 灰白色細砂を若干含む、しまる
5Y7/1 灰白色粘質土 粘性強、層の下位に高浜炭并層の石積出
II 2.5Y5/1 黄灰色シルト しまりが強く、比較的均質
III 10YR7/1 灰白色粘質土 表面が褐色に酸化し、しまりが強く、比較的均質
N7/O 灰白色粘土 酸化した部分が硬い

SE1211

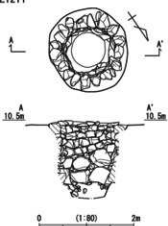


図21 SD894 断面図、SK1208・SK1209 平・断面図、出土遺物、SE246・SE1211 平・断面図

第四章 総括

調査では、弥生時代後期、平安時代、中世の3時期の遺構を確認した。

【弥生時代後期】 検出した遺構は溝3条である。3条とも北西から南東方向へと延びる溝で、壇場山古墳の立地する段丘の延びる方向と概ね揃っている。

【平安時代】 検出した遺構は、掘立柱建物跡3棟、櫓2条、瓦敷遺構、溝7条、被熱痕跡である。これらの遺構は、南北方向のSD982・SD1213より西側、東西方向のSD140より南側の限定された範囲で検出した。これらの溝は、播磨国分寺跡の伽藍中軸線に沿っており、一連の区画遺構と考えられる。区画内で検出したSX333は掘込総地業の可能性のある遺構で、その内部は以下のように変遷している。SX333全域を掘り込む→格子状に溝を掘削→埋戻し

(Ⅰ層)→SD650・SD720掘削(Ⅰ層上面)→埋没→SB1の構築→瓦敷遺構→埋戻し(Ⅱ層)。SX333の埋没後(Ⅱ層上面)にSB2・SB3、SA1、SA2、SD388が構築されている。被熱痕跡は、瓦敷遺構に近接した位置とⅡ層上面で計8か所で確認した。鍛冶滓等の出土はないが、Ⅱ層中には漆付着土器も含まれ、何らかの手工業生産が継続的に行われていたと思われる。SX333が掘り込み地業であれば、上部に重量物の存在が想定されるが、石材2石を除き検出状況からは判然としない。SX333Ⅱ層やSD140から出土した緑釉陶器は9世紀中～後半に位置づけられ、在土器を含む良好な資料群といえる。なお、SX333のⅡ層からは文字瓦を含め、多くの遺物が出土したが、布目瓦を別にすれば奈良時代に遡る遺物を含んでいない。このことから調査区内には国分寺創建段階では遺構は存在せず、平安時代前期になって、主要伽藍の北西にあたる場所に、新たに区画遺構が築かれたことが判明する。

【中世】 調査区北部と東部において掘立柱建物跡9棟、櫓5条、溝1条、土坑3基を検出した。建物は姫路市域における中世集落跡で見つかる建物跡と同規模である。また、石造品135の存在はあるものの、遺物量も多くなく、組成にも特筆すべき点はない。ただ、遺構主軸が播磨郡の条里方向ではなく、国分寺の伽藍中軸線に沿っている。播磨国分寺は南北朝期の戦乱で焼失したとされていることから、中世段階の建物跡が国分寺と関連している可能性は高い。

まとめ 調査の最大の成果は、主要伽藍の外側において、平安時代前期に主要伽藍とは離れた位置で、別区画を持つ施設が存在が判明したことである。こうした「本寺に隣接するあるいは寺院地の一角を占める別区画」を「別院」と理解すれば(上原2020)、検出した遺構群は、平安時代前期に成立した播磨国分寺の「西北別院」と評価することも可能である。諸国の国分寺においても、主要伽藍外における平安時代以降の実態が判明した例は少なく、今回の調査成果は、播磨国分寺は元より平安時代における国分寺の実態に迫る極めて重要な成果といえる。

参考文献

- 上原真人 2020『古代寺院の生き残り戦略—資料帳が語る平安時代の広隆寺—』柳原出版
 姫路市史編集専門委員会(編) 1998『姫路市史』第7巻上 資料編自然
 姫路市史編集専門委員会(編) 2010『姫路市史』第7巻下 資料編考古

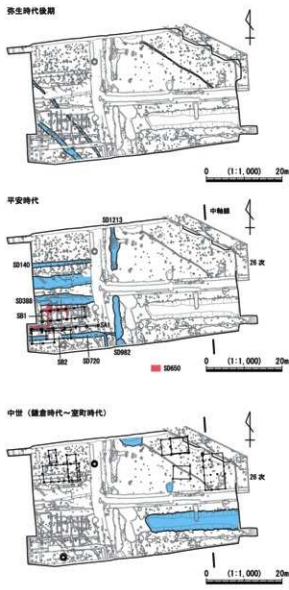
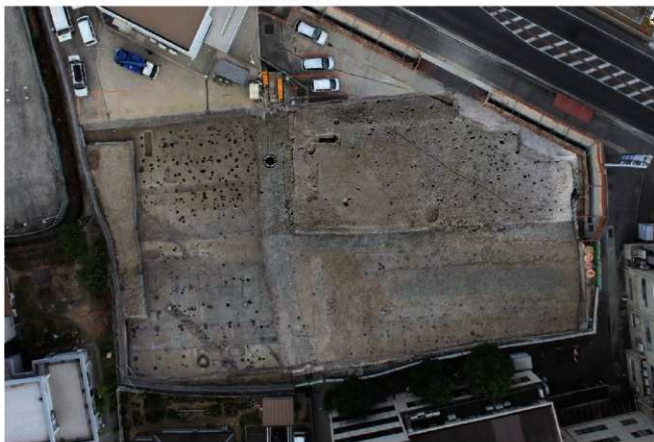


図22 各時代主要遺構図



調査地から壇場山古墳を望む（西から）



調査区全景（オルソ写真）



調査区西部全景（北から）



調査区南西部全景（東から）



調査区北西部全景（東から）



SX333 検出状況（東から）



調査区西壁（南東から）



SX333 上層完掘状況（東から）



SX333 遺物出土状況（南から）



瓦敷全景（北から）



SX333 瓦瑣まり検出状況（オルソ写真）



調査区西部南側発掘状況(東から)



SL536 検出状況(東から)



SL432 検出状況および瓦出土状況(北から)



SD650 発掘状況(北から)



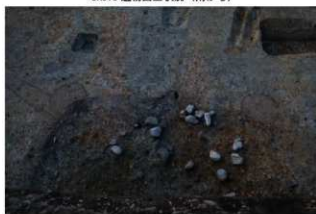
SD388・SD195・SD140 完掘状況 (東から)



SK573 遺物出土状況 (南から)



SD982・SD720 断面 (北から)



SK1209 遺物出土状況 (北から)



SE1211 (北から)

報告書抄録

ふりがな	はりまこくぶんじあと だい27じはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	播磨国分寺跡—第27次発掘調査報告書—							
副書名								
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第119集							
編著者名	三好愛美 中川猛							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	令和4年(2022年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はりまこくぶんじあと 播磨国分寺跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 みくにのちやうこくぶんじ 御国野町国分寺 あまがけのみち 字竹ノ下132番1他	28201	020482	34° 49′ 20″	134° 43′ 51″	2020.9.15 ～ 2021.2.19	1,607㎡	病院建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		遺跡調査番号	
播磨国分寺跡	社寺跡	平安 ～ 室町時代	区画溝、掘立建物跡、 柱穴、土坑、井戸		土師器・須恵器・ 緑釉陶器・軒丸瓦・ 軒平瓦		20200275	
要約	平安時代を中心に、弥生時代後期、中世の3時期の遺構を確認した。今回の調査の最大の成果は、播磨国分寺の主要伽藍外側において、平安時代前期に主要伽藍とは離れた位置で、別区画の施設が存在することが判明したことである。検出した遺構の向きが伽藍主軸線に沿うことから、播磨国分寺の「西北別院」と評価することも可能である。諸国の国分寺を含め、主要伽藍外側における平安時代以降の動態が判明している例は少なく、今回の調査では国分寺の実態に迫る極めて重要な成果が得られた。							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第119集

播磨国分寺跡

—第27次発掘調査報告書—

令和4年(2022年)3月31日発行

編 集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL (079)252-3950

発 行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 株式会社デイリー印刷
〒671-0218 兵庫県姫路市飾東町庄57-2